

# 歴史回廊

第8部・芸備孝義伝の世界⑤

少々季節はずれな挿絵場面ではあるが、三下郡板橋村(現庄原市)に住んでいた坂十郎の母子二人暮らしの孝行姿を紹介しよう。濃苦しい夏の夜、老いた母に群がる蚊をうちわで追い払い、母の安眠を貞守る坂十郎。

## ■煙を立て追い払う

夏の生活でおじやま虫といえは、今も昔も変わらぬ蚊・ハエが代表格だ。現在使用している殺虫剤や蚊取り線香、電気蚊取り器などがなかった江戸時代。蚊対策には、蚊の侵入をシャットアウトする「蚊帳(いり)の防護ネット」や、干したミカンの皮や、松・杉などのおがくずをいぶし煙を立てて蚊を追い払う「蚊やじ」が頼りになる数少ない道具だった。この挿絵にも母の枕元に蚊帳が準備され、上がり口に

## 蚊対策 うちわや蚊帳が頼り

置いている。実はこの場面では、母はまだ寝入っていない。さきほどから先が、坂十郎が広島藩より米五俵を賜り、称賛された孝行息子のお話であることが文章から見受けられる。彼は早くから蚊帳をつると、風通しが悪く暑苦しいだろうと察し、まずはうちわで蚊をよけ、母の熟睡を確認した後、ようやく寢床へ蚊帳をつっけている。道具ひとつを使うにも人を思いやる心遣いが大切なことを坂十郎の行動から学ぶことができる。

## ■殺虫剤登場は明治

坂十郎とさんたの様子からも、江戸時代には蚊を防除する方法はあっても、殺虫方法がなかったことをうかがい知ることができる。ようやく殺虫剤の決定打として登場したのが、明治二三(一八九〇)年に発明された、おなじみの蚊取り線香。ちなみに当時はまだ湯巻き状ではなく棒状線香だった。坂十郎とさんの家に蚊取り線香があれば、夏の苦勞も軽減したことだろう。



老母が熟睡するまで、蚊をよけて追い払う坂十郎 (広島市公文書館蔵)

(広島市郷土資料館学芸員・山根紀子)

土曜日に掲載します